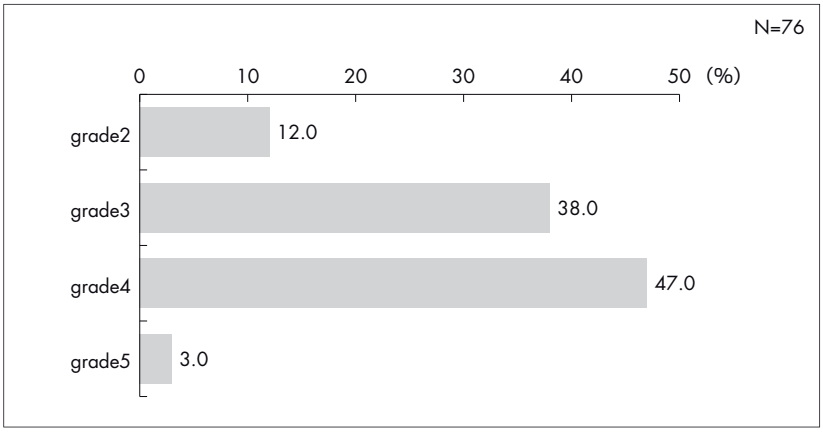
6 アナフィラキシー

「食物アレルギー」に対する認識が広まるにつれ、アレルギー反応としての「アナフィラキシー」、さらに全身に劇的な反応が発露し生命が危機的状況に陥る「アナフィラキシーショック」についての認識も広まりつつあります。緊急の対処が必要となる「アナフィラキシー」をめぐる状況について見ていきましょう。

アナフィラキシー症状の重症度



調査時期 2009年4月～2014年3月

調査対象 徳島赤十字病院で小児科外来、救急外来を受診した15歳以下のアナフィラキシー症例76(男47：女29)。年齢は生後56日～15歳。このうち43例が入院。
アナフィラキシーショックは76例中14例(18%)

調査方法 診療録を用いて後方視的に検討

出典：『当院における5年間のアナフィラキシー症例の検討』
徳島赤十字病院　小児科
阿部容子　七條光一　近藤朝美　谷口多喜子　高橋昭良　渡邉力　中津忠則
徳島赤十字病院医学雑誌 20：25-29, 2015

※アナフィラキシーのグレード分類

	グレード1	グレード2	グレード3	グレード4	グレード5
皮膚	〈限局性〉 掻痒感、発赤、蕁麻疹、 血管性浮腫	〈全身性〉 掻痒感、発赤、蕁麻疹、 血管性浮腫	左記症状	左記症状	左記症状
消化器	口腔の掻痒感、違和感、 口唇腫脹	嘔気/1～2回の嘔吐、 下痢、一過性の腹痛	繰り返す嘔吐、下痢、 持続する腹痛	左記症状	左記症状
呼吸器	咽頭の掻痒感、違和感	軽度の鼻閉、鼻汁、 1～2回のくしゃみ、 単発的な咳	著明な鼻閉、鼻汁、 繰り返すくしゃみ、 持続する咳、 咽頭掻痒感	咽頭絞扼感、嗄声、 犬吠様咳嗽、嚥下困難、 呼吸困難、喘鳴、 チアノーゼ	呼吸停止
循環器	—	—	頻拍 (15回/分以上の上昇)	不整脈、血圧低下	重度の徐脈、 血圧低下著明、心停止
神経	—	活動性の低下	不安感	死の恐怖感	意識消失

すべての症状が必須ではない。症状のグレードは最もグレードの高い臓器症状に基づいて判定する。
グレード1はアナフィラキシーとはしない。
Sampson HA：Pediatricks, 2003, 111(6)：1601-1608を改変

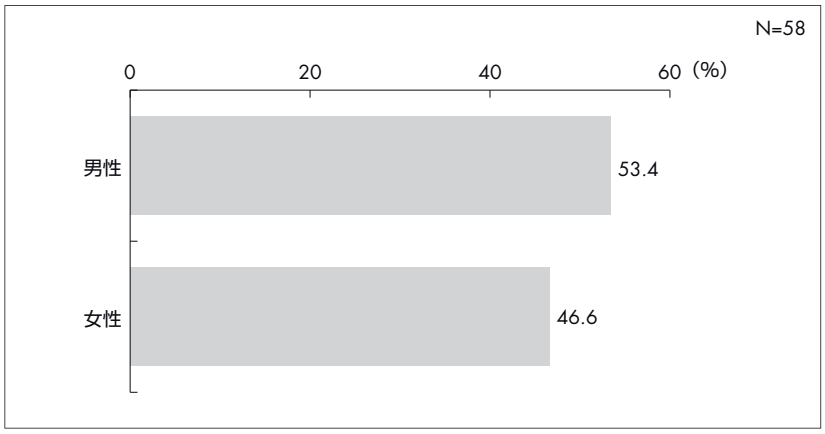
アナフィラキシーの重症度

		グレード1	グレード2	グレード3
皮膚症状	赤み・じんま疹	部分的、散在的	全身性	—
	かゆみ	軽度のかゆみ	強いかゆみ	—
粘膜症状	口唇・目・顔の腫れ	口唇、瞼の腫れ	顔全体の腫れ	—
	口、喉の違和感	口、喉のかゆみ、違和感	飲み込みづらい	喉や胸が強く締め付けられる、声かれ
消化器症状	腹痛	弱い腹痛（がまんできる）	明らかな腹痛	強い腹痛（がまんできない）
	嘔吐・下痢	嘔気、単回の嘔吐、下痢	複数回の嘔吐、下痢	繰り返す嘔吐、下痢
呼吸器症状	鼻みず・鼻づまり・くしゃみ	あり	—	—
	咳（せき）	弱く連続しない咳	時々連続する咳、咳込み	強い咳き込み、犬の遠吠え様の咳
	喘鳴、呼吸困難	—	聴診器で聞こえる弱い喘鳴	明らかな喘鳴、呼吸困難、チアノーゼ
全身症状	血圧低下	—	—	あり
	意識状態	やや元気がない	明らかに元気がない 横になりたがる	ぐったり～意識低下 ～意識消失、失禁
対応	抗ヒスタミン薬	○	○	○
	ステロイド	△	△	△
	気管支拡張薬吸入	△	△	△
	エピペン®	×	△	○
	医療機関受診	△	○（応じて救急車）	◎（救急車）

Sampson HA：Pediatricks, 2003, 111（6）：1601-1608を（独）国立病院機構相模原病院改変

出典：『保育所におけるアレルギー対応ガイドライン』
厚生労働省　平成23（2011）年3月

食物アナフィラキシーの男女比



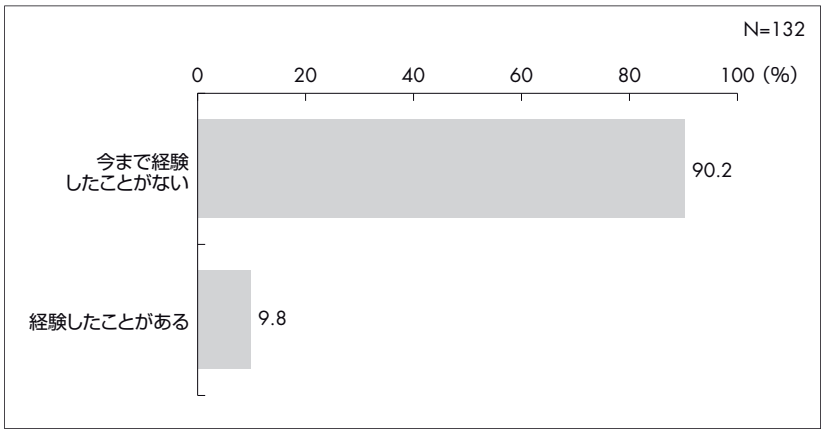
調査時期　1980年11月～2009年10月

調査対象　上記の29年間に救急搬送、あるいは救急外来を受診したアナフィラキシー症状を呈した302例のうち、食物アナフィラキシーによる58例（男31：女27）。
平均年齢は43.0±19.7歳（男：44.2±20.5歳　女：41.7±19.1歳）。

調査方法　診療録より後方視的に検討

出典：『当センターにおけるアナフィラキシー 302例の検討』
岩手県高度救命救急センター
塩谷信吉ら
日救急医会誌．2010；21：282-92

アナフィラキシーショックを発症した園児の対応経験



出典：平成25年度(2013年度)『特別配慮が必要な子どもの実態調査報告書』
調査主体：一般社団法人 札幌市私立保育園連盟　調査研究部

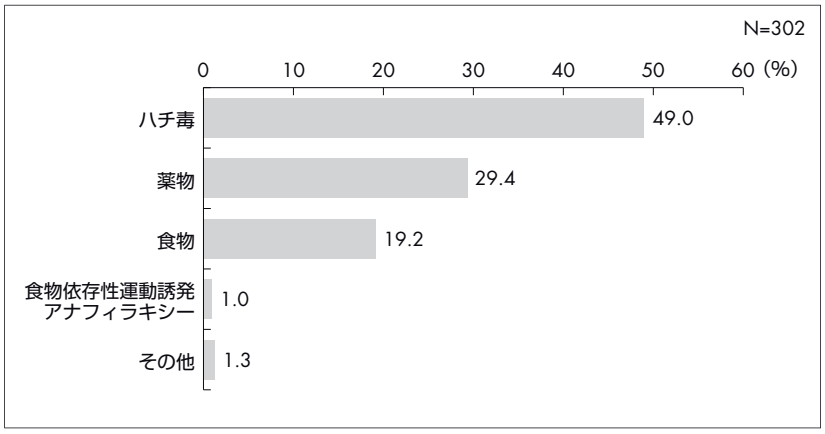
調査基準日　平成25年9月2日現在

調査対象　私立保育連盟園193園を対象に調査し、回答があった151園

調査方法　「特別配慮が必要な子どもの実態調査票」によるアンケート調査

引　用　平成25年度(2013年度)『特別配慮が必要な子どもの実態調査報告書』より作図、引用

アナフィラキシー症状の原因



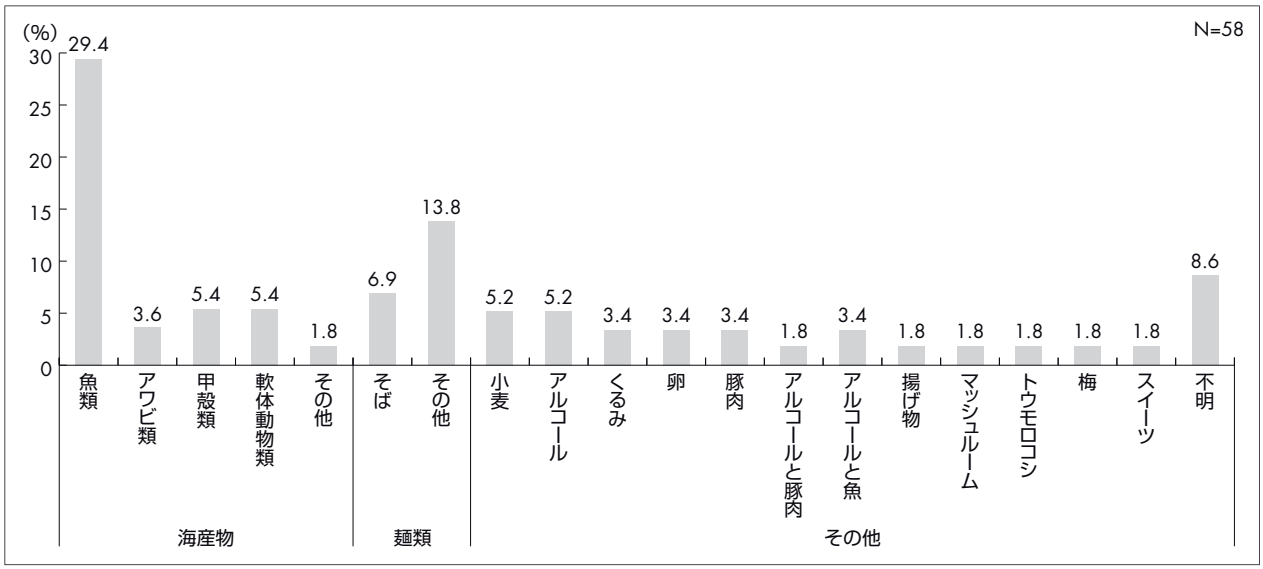
出典：『当センターにおけるアナフィラキシー 302例の検討』
岩手県高度救命救急センター
塩谷信吉ら
日救急医会誌. 2010；21：282-92

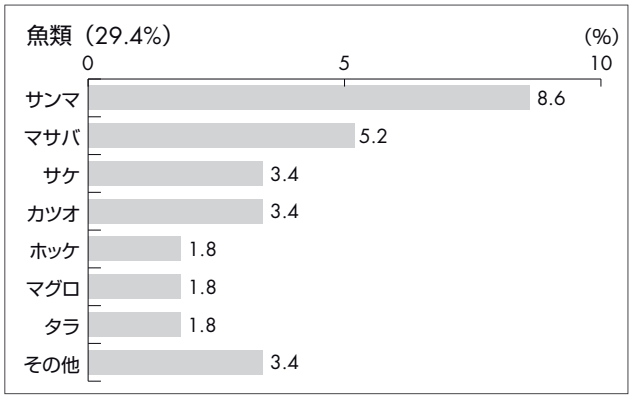
調査時期　1980年11月～2009年10月

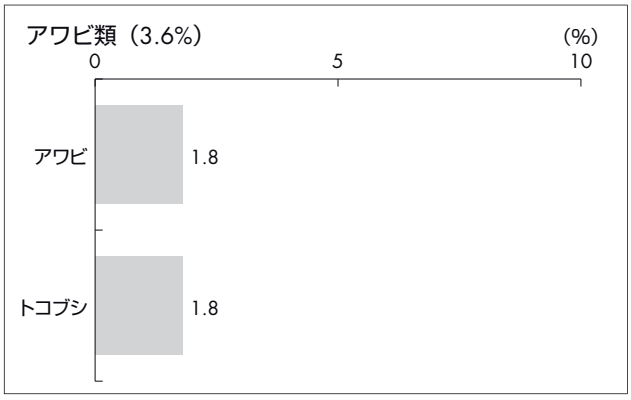
調査対象　上記の29年間に救急搬送、あるいは救急外来を受診したアナフィラキシー症状を呈した302例(男190：女112)。
平均年齢は48.0±19.6歳(男：48.8±19.3歳　女：47.6±20.1歳)

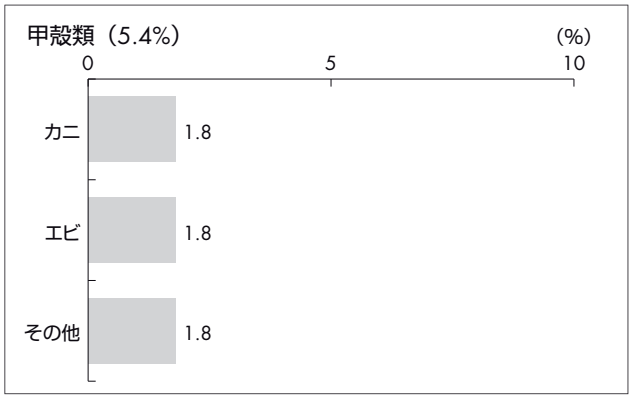
調査方法　診療録より後方視的に検討

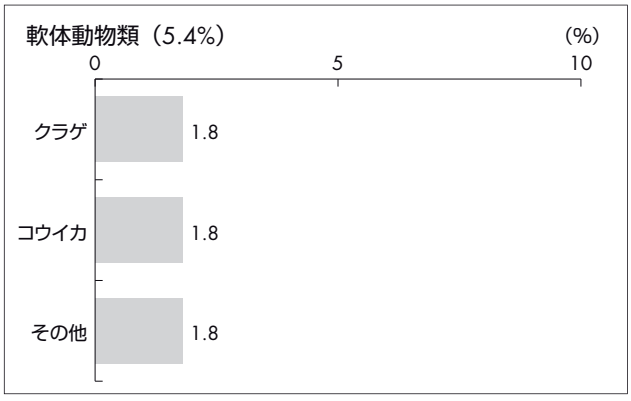
食物アナフィラキシーの原因











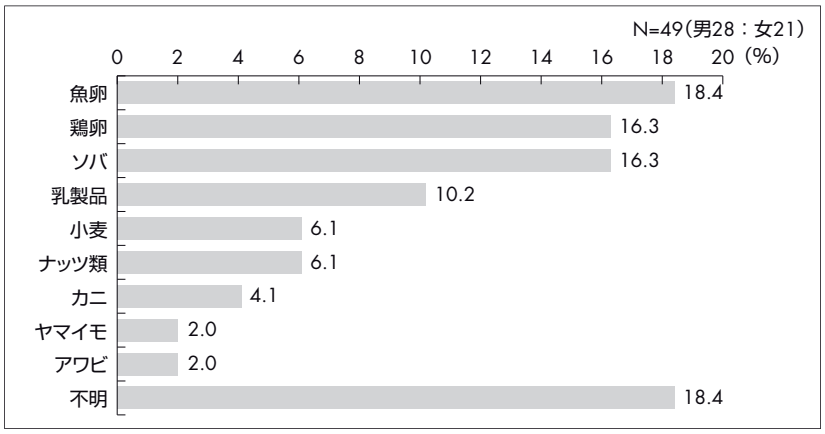
出典：『当センターにおけるアナフィラキシー 302例の検討』
岩手県高度救命救急センター
塩谷信吉ら
日救急医会誌．2010；21：282-92

調査時期　1980年11月～2009年10月

調査対象　上記の29年間に救急搬送、あるいは救急外来を受診したアナフィラキシー症状を呈した302例のうち、食物アナフィラキシーによる58例(男31：女27)
平均年齢は43.0±19.7歳(男：44.2±20.5歳　女：41.7±19.1歳)。

調査方法　原因、年齢・性別、症状について、診療録より後方視的に検討

原因食物の内訳



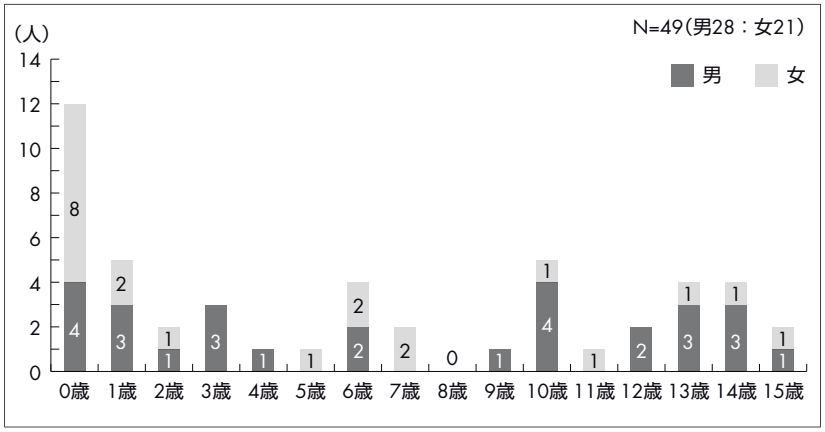
出典：『アナフィラキシーを呈した小児即時型食物アレルギーの年齢と原因物質に関する検討』
津軽保健生活協同組合健生病院 小児科
國吉保孝ら
日本プライマリ・ケア連合学会誌2015, vol.38, no.2, p.116-120.

調査時期 2008年1月～2013年12月

調査対象 津軽保健生活協同組合健生病院救急外来を受診した15歳以下のアナフィラキシーを呈した即時型食物アレルギー49例(男28:女21)

調査方法 診療録より後方視的に検討

年齢と性別による分布



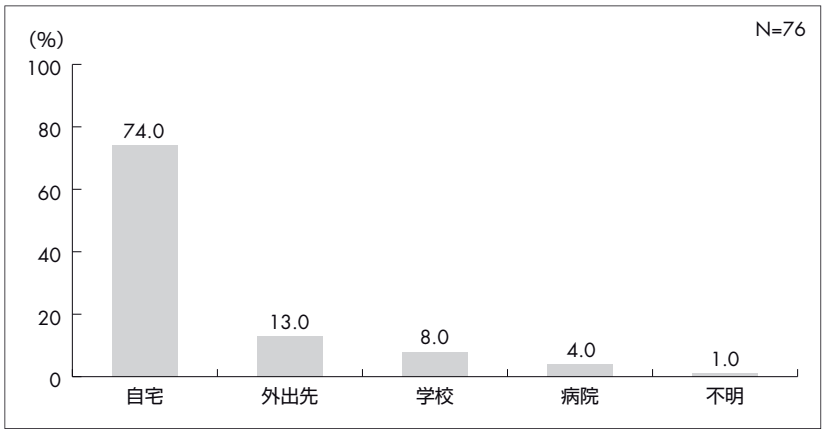
出典：『アナフィラキシーを呈した小児即時型食物アレルギーの年齢と原因物質に関する検討』
津軽保健生活協同組合健生病院 小児科
國吉保孝ら
日本プライマリ・ケア連合学会誌2015, vol.38, no.2, p.116-120.

調査時期 2008年1月～2013年12月

調査対象 津軽保健生活協同組合健生病院救急外来を受診した15歳以下のアナフィラキシーを呈した即時型食物アレルギー49例(男28:女21)

調査方法 診療録より後方視的に検討

アナフィラキシー症状の発生場所



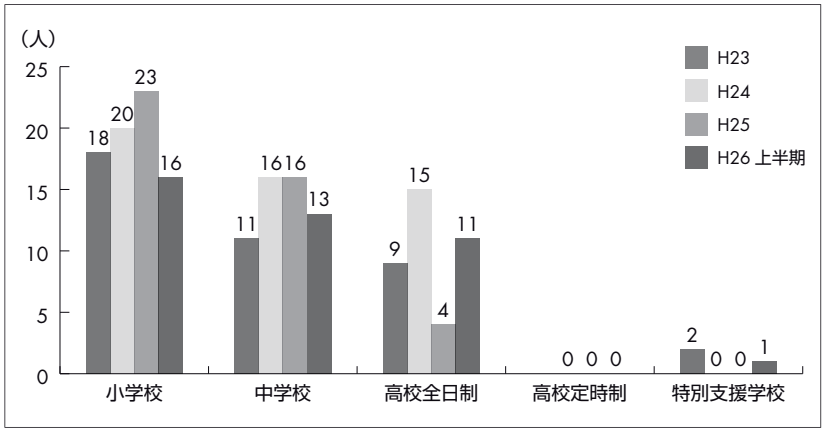
出典：『当院における5年間のアナフィラキシー症例の検討』
徳島赤十字病院　小児科
阿部容子　七條光一　近藤朝美　谷口多喜子　高橋昭良　渡邉力　中津忠則
徳島赤十字病院医学雑誌 20：25-29, 2015

調査時期　2009年4月～2014年3月

調査対象　徳島赤十字病院で小児科外来、救急外来を受診した15歳以下のアナフィラキシー症例76（男47：女29）。年齢は生後56日～15歳。このうち43例が入院。

調査方法　診療録を用いて後方視的に検討

校種別アナフィラキシーショック又はアナフィラキシー症状を起こした児童生徒数の推移



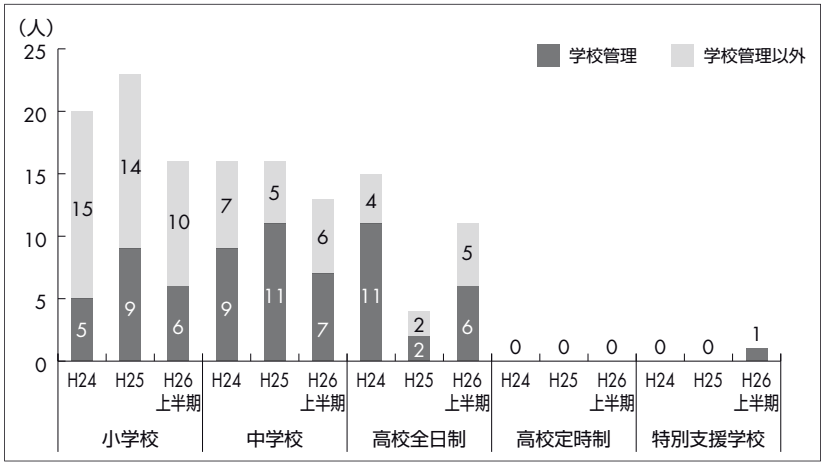
出典：『平成26年（2014年）山梨県アレルギー疾患に関する実態調査結果』
山梨県教育委員会スポーツ健康課

調査時期　平成24年度　平成24年9月
平成25年度　平成25年11月
平成26年度　平成26年11月

調査対象　山梨県内公立小学校・中学校・全日制高校・定時制高校・特別支援学校の児童生徒
平成24年度
小学校44,796人、
中学校23,939人、
高等学校20,068人
平成25年度
小学校43,701人、
中学校23,304人、
高等学校19,762人
平成26年度
小学校42,546人、
中学校22,989人、
高等学校19,243人

調査方法　山梨県教育委員会が市町村教育委員会を通して調査票を各学校に依頼。

校種別アナフィラキシーショック又はアナフィラキシー症状を起こした児童生徒数の推移（学校管理下であったかどうか）



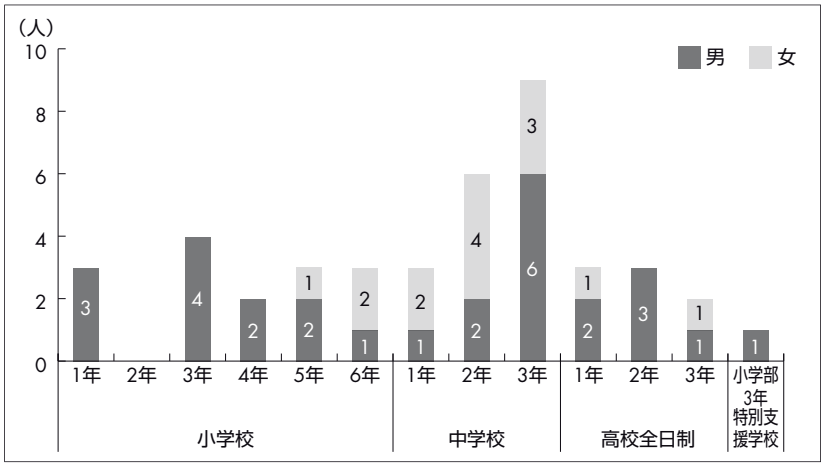
出典：『平成26年（2014年）山梨県アレルギー疾患に関する実態調査結果』
山梨県教育委員会スポーツ健康課

調査時期 平成24年度　平成24年9月
平成25年度　平成25年11月
平成26年度　平成26年11月

調査対象 山梨県内公立小学校・中学校・全日制高校・定時制高校・特別支援学校
平成25年度～平成26年9月内に学校管理内でアナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー症状を起こした児童生徒

調査方法 山梨県教育委員会が市町村教育委員会を通して調査票を各学校に依頼。

学校管理の中でアナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー症状を発症した児童生徒の男女比



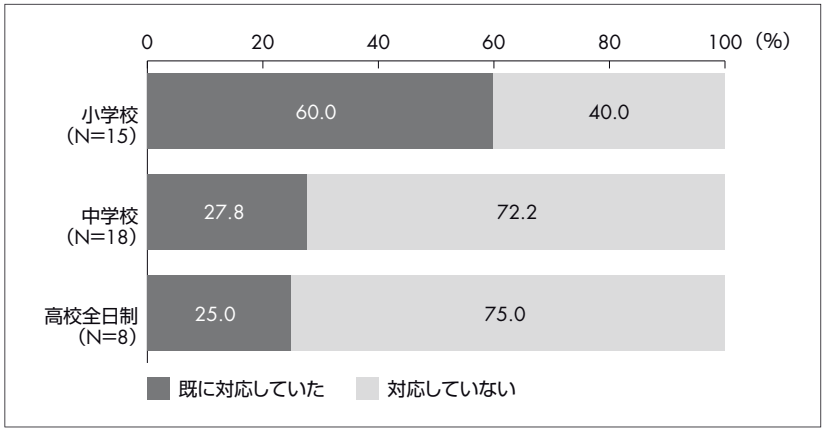
出典：『平成26年（2014年）山梨県アレルギー疾患に関する実態調査結果』
山梨県教育委員会スポーツ健康課

調査時期 平成26年11月

調査対象 山梨県内公立小学校・中学校・全日制高校・定時制高校・特別支援学校
平成25年度～平成26年9月内に学校管理内でアナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー症状を起こした児童生徒

調査方法 山梨県教育委員会が市町村教育委員会を通して調査票を各学校に依頼

学校管理の中でアナフィラキシーショックまたは アナフィラキシー症状を発症した児童生徒への対応



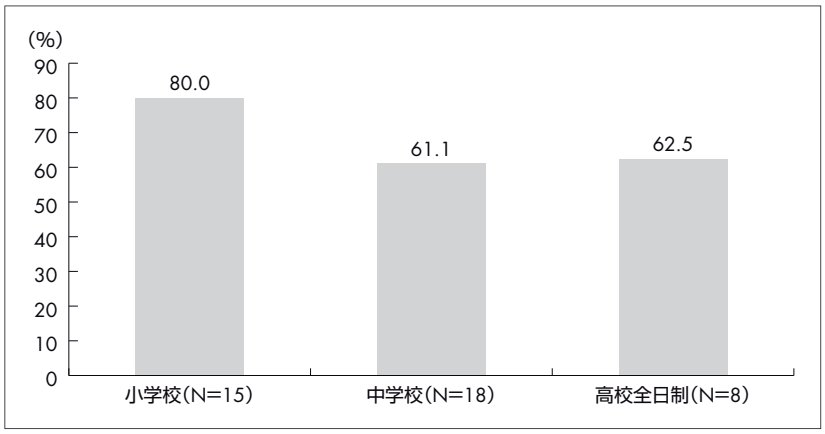
出典：『平成26年(2014年)山梨県アレルギー疾患に関する実態調査結果』
山梨県教育委員会スポーツ健康課

調査時期　平成26年11月

調査対象　山梨県内公立小学校・中学校・高校全日制・高校定時制・特別支援学校
平成25年度～平成26年9月内に学校管理の中でアナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー症状を起こした児童生徒
小学校15人、中学校18人、高校全日制8人、特別支援学校小学部1人

調査方法　山梨県教育委員会が市町村教育委員会を通して調査票を各学校に依頼

初発事例の割合・学校管理の中でアナフィラキシーショックまたは アナフィラキシー症状を発症した児童生徒



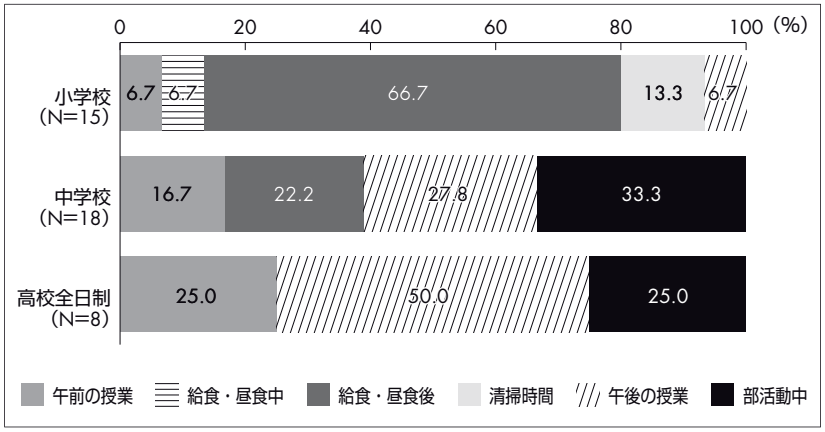
出典：『平成26年(2014年)山梨県アレルギー疾患に関する実態調査結果』
山梨県教育委員会スポーツ健康課

調査時期　平成26年11月

調査対象　山梨県内公立小学校・中学校・高校全日制・高校定時制・特別支援学校
平成25年度～平成26年9月内に学校管理の中でアナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー症状を起こした児童生徒
小学校15人、中学校18人、高校全日制8人、特別支援学校小学部1人

調査方法　山梨県教育委員会が市町村教育委員会を通して調査票を各学校に依頼

学校管理の中で発症したアナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー症状を発症した状況



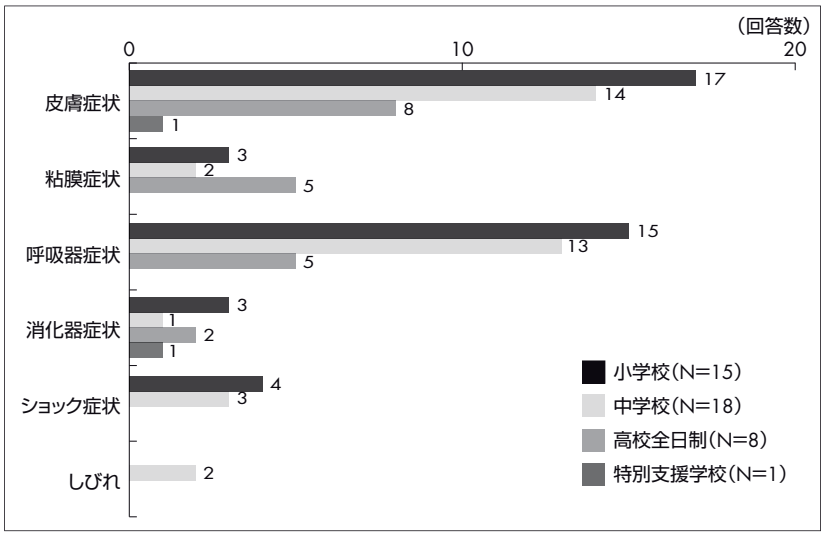
出典：『平成26年(2014年)山梨県アレルギー疾患に関する実態調査結果』
山梨県教育委員会スポーツ健康課

調査時期 平成26年11月

調査対象 山梨県内公立小学校・中学校・高校全日制・高校定時制・特別支援学校
平成25年度～平成26年9月内に学校管理の中でアナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー症状を起こした児童生徒
小学校15人、中学校18人、高校全日制8人、特別支援学校小学部1人

調査方法 山梨県教育委員会が市町村教育委員会を通して調査票を各学校に依頼

学校管理の中で発症したアナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー事例の症状



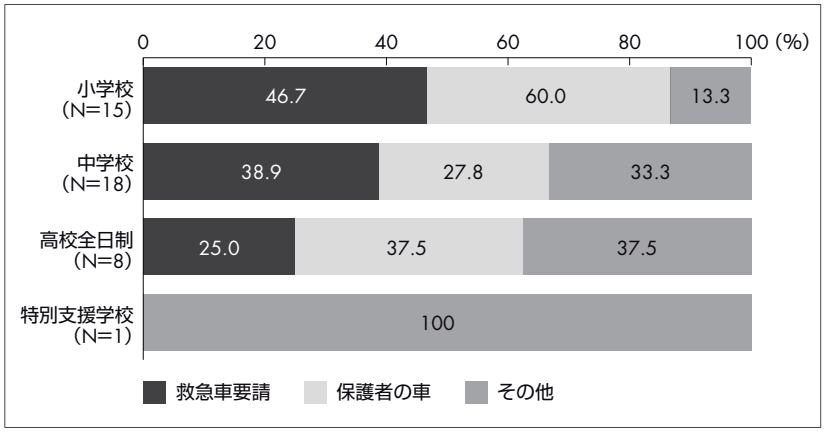
出典：『平成26年(2014年)山梨県アレルギー疾患に関する実態調査結果』
山梨県教育委員会スポーツ健康課

調査時期 平成26年11月

調査対象 山梨県内公立小学校・中学校・高校全日制・高校定時制・特別支援学校
平成25年度～平成26年9月内に学校管理の中でアナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー症状を起こした児童生徒
小学校15人、中学校18人、高校全日制8人、特別支援学校小学部1人

調査方法 山梨県教育委員会が市町村教育委員会を通して調査票を各学校に依頼

アナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー症状を発症した児童生徒への対応状況
学校管理の中で発症した際の受診の移送手段



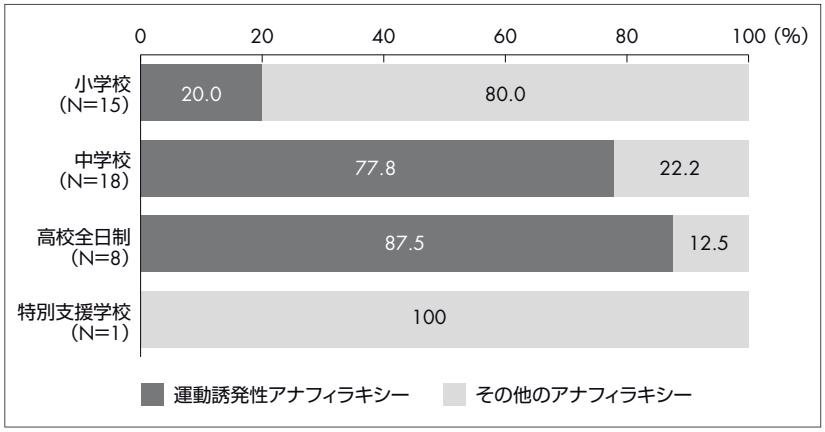
出典：『平成26年(2014年)山梨県アレルギー疾患に関する実態調査結果』
山梨県教育委員会スポーツ健康課

調査時期　平成26年11月

調査対象　山梨県内公立小学校・中学校・高校全日制・高校定時制・特別支援学校
平成25年度～平成26年9月内に学校管理の中でアナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー症状を起こした児童生徒
小学校15人、中学校18人、高校全日制8人、特別支援学校小学部1人

調査方法　山梨県教育委員会が市町村教育委員会を通して調査票を各学校に依頼

学校管理の中でアナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー症状を発症した事例の診断名



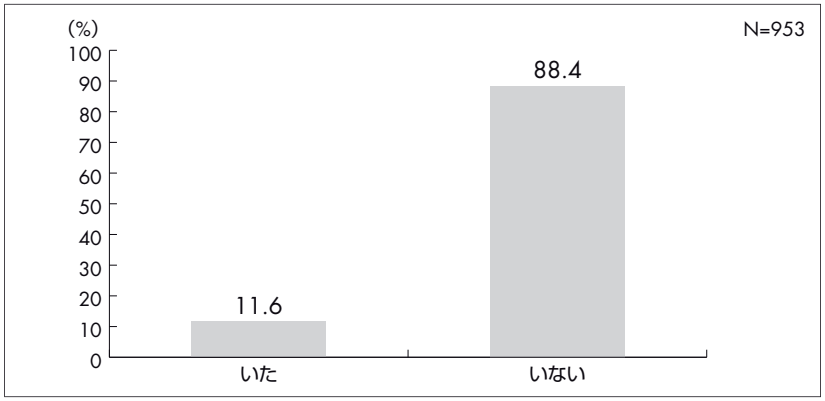
出典：『平成26年(2014年)山梨県アレルギー疾患に関する実態調査結果』
山梨県教育委員会スポーツ健康課

調査時期　平成26年11月

調査対象　山梨県内公立小学校・中学校・高校全日制・高校定時制・特別支援学校
平成25年度～平成26年9月内に学校管理の中でアナフィラキシーショック又は、アナフィラキシー症状を起こした児童生徒
小学校15人、中学校18人、高校全日制8人、特別支援学校小学部1人

調査方法　山梨県教育委員会が市町村教育委員会を通して調査票を各学校に依頼

食物によるアナフィラキシー、ぜん息等で病院受診した園児は過去１年間にいましたか？



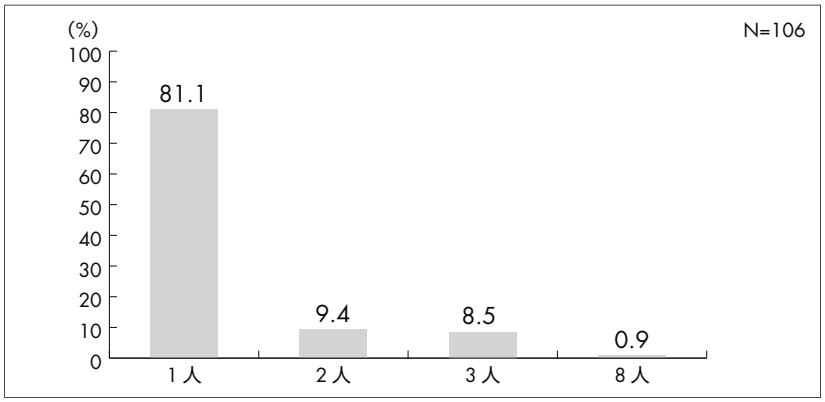
調査期間 平成21年7月10日～7月31日

調査対象 日本保育園保健協議会・会員関連保育所953園（対象園児105,853人）

調査方法 アンケート調査票を送付

出典：『保育所におけるアレルギー対応にかかわる調査研究』
日本保育園保健協議会・会員関連保育所　全国調査(7月)
日本保育園保健協議会会長 鴨下重彦
平成22年3月　財団法人 こども未来財団

食物によるアナフィラキシー、ぜん息等で病院受診した園児は過去１年間に何人いましたか？



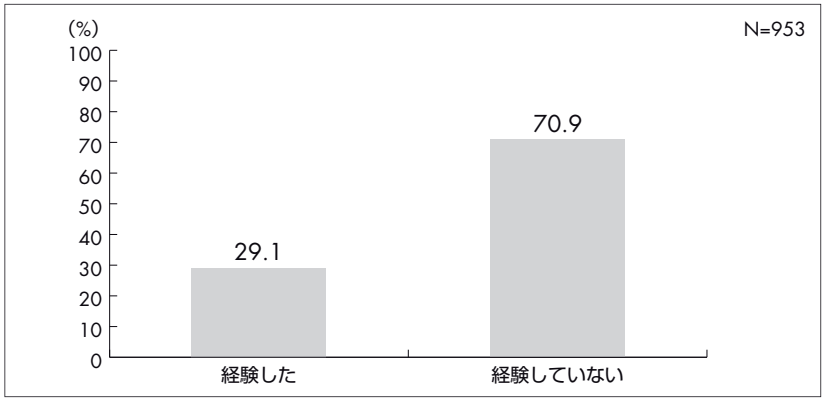
調査期間 平成21年7月10日～7月31日

調査対象 日本保育園保健協議会・会員関連保育所953園(対象園児105,853人)のうち過去1年間に食物アナフィラキシー、喘息等で病院受診した児のいる園106園

調査方法 アンケート調査票を送付

出典：『保育所におけるアレルギー対応にかかわる調査研究』
日本保育園保健協議会・会員関連保育所　全国調査(7月)
日本保育園保健協議会会長 鴨下重彦
平成22年3月　財団法人 こども未来財団

食物アレルギー児の誤食事故（異物を除く）を過去１年間に経験しましたか？



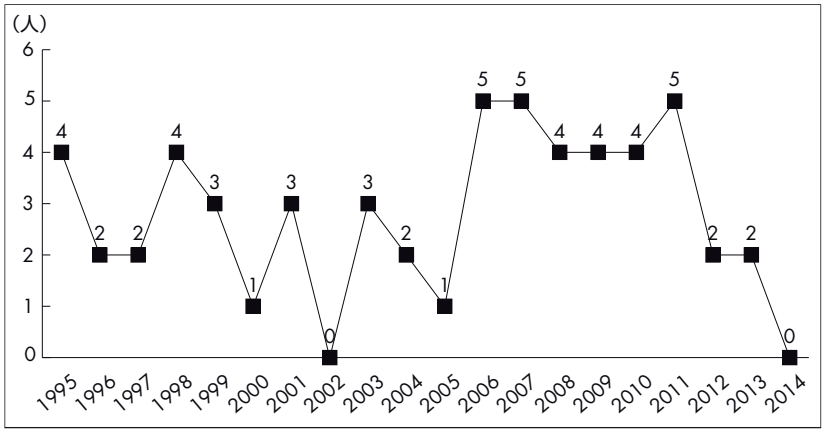
調査期間　平成21年7月10日～7月31日

調査対象　日本保育園保健協議会・会員関連保育所953園（対象園児105,853人）

調査方法　アンケート調査票を送付

出典：『保育所におけるアレルギー対応にかかわる調査研究』
日本保育園保健協議会・会員関連保育所　全国調査(7月)
日本保育園保健協議会会長 鴨下重彦
平成22年3月　財団法人 こども未来財団

有害食物反応によるアナフィラキシーショック死



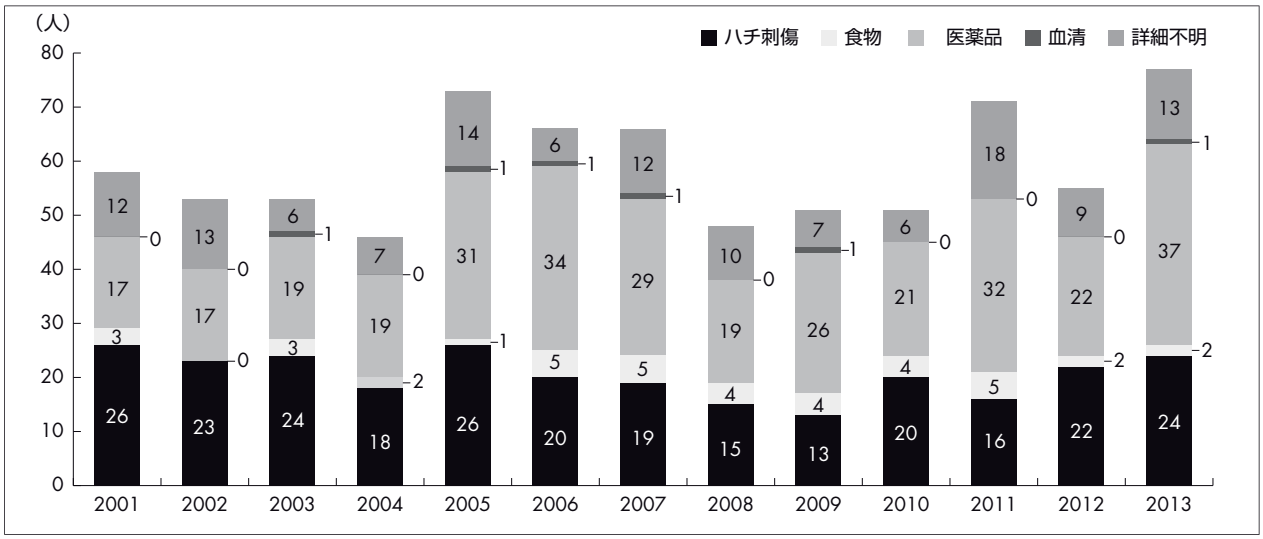
調査時期　1995年～2014年

調査対象　全数調査　ICD-10疾病分類T78.0に分類されたケース

調査方法　役所への届出による出生死亡等の調査

出典：『人口動態統計　1995年～2014年』

アナフィラキシーショックによる死亡数



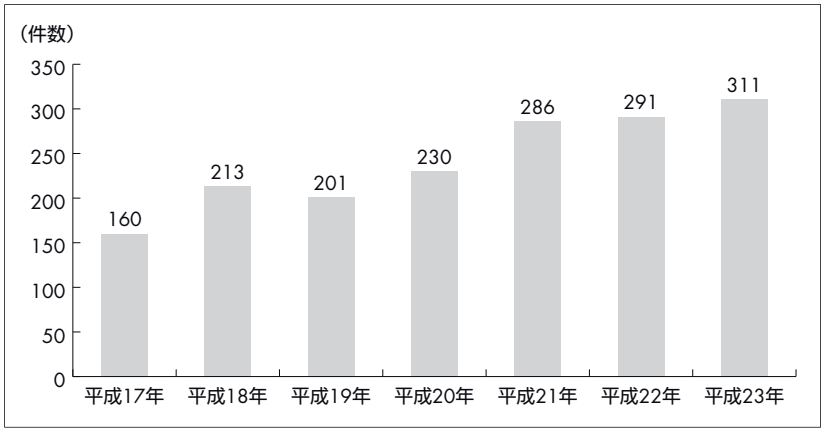
出典：厚生労働省 人口動態統計「死亡数、性・死因（死因基本分類）別」
2001年～2013年

調査期間 各年実施、そのうち2001年～2013年のデータ

調査対象 日本における日本人の死亡者

調査方法 全数調査

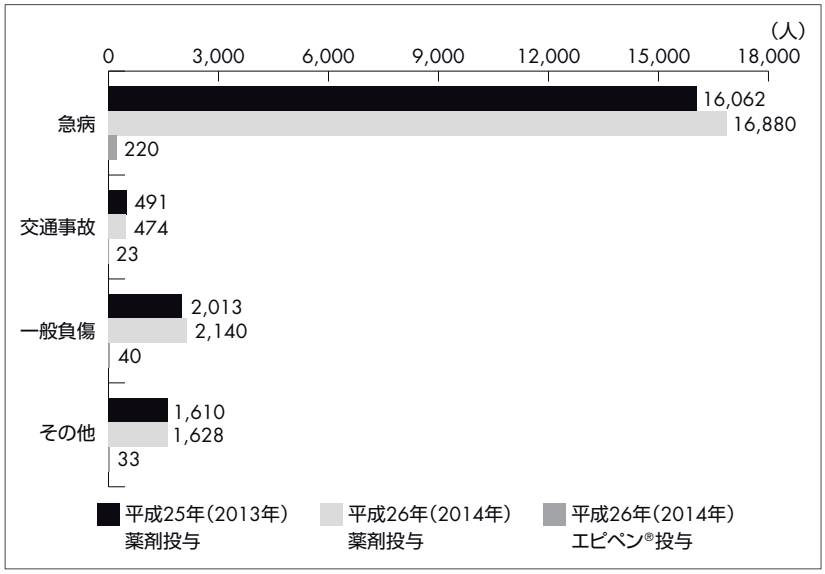
食物アレルギー事故発生件数



出典：雑誌『学校給食No.704』
独立行政法人 日本スポーツ振興センターの災害共済給付データ

調査期間 平成17年～平成23年

救急隊員の行った応急処置・薬剤投与とエピペン® 投与



出典：『平成26(2014)年版　救急・救助の現況』
『平成27(2015)年版　救急・救助の現況』
消防庁

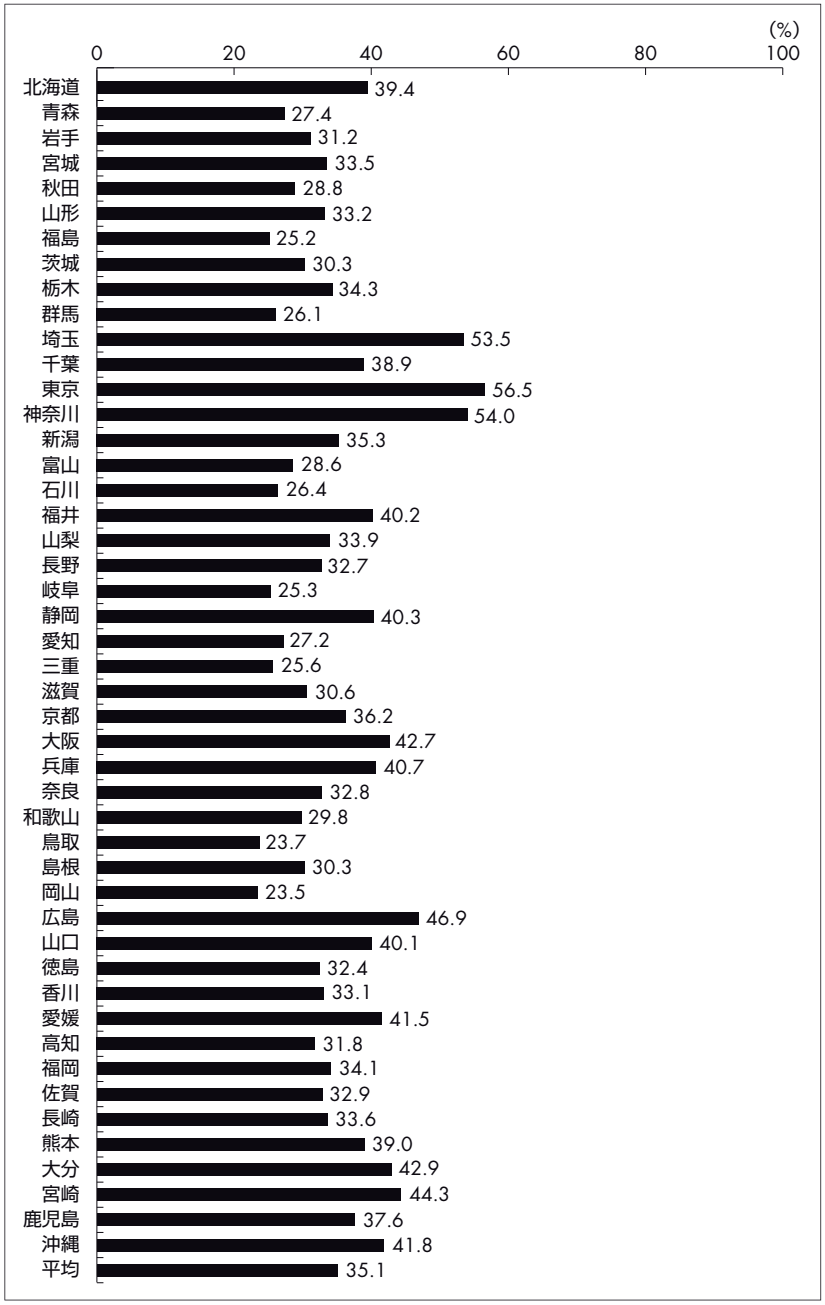
救急隊員の行った応急処置等の状況(事故種別による分類)
薬剤投与：救急救命士法に基づき重度傷病者に対して行う救急救命処置のうち、静脈路からの薬剤(アドレナリン)の投与　平成18年4月から実施可能となった。
エピペン®投与：平成21年4月以後実施可能

調査時期　2013年～2014年

調査対象　平成26年(2014年)度における応急処置等対象搬送人員5,290,434人のうち、エピペン®投与が行われた316人
平成26年(2014年)度における応急処置等対象搬送人員5,290,434人のうち、薬剤投与が行われた21,122人
平成25年(2013年)度における応急処置等対象搬送人員5,340,117人のうち、薬剤投与が行われた20,176人

調査方法　消防機関の行う救急業務、救助業務及び都道府県の行う消防防災ヘリコプターによる消防活動に関する実施状況について、数値データ等を基に体系的に整理した

アドレナリン投与認定救急救命士の割合



調査時期 2014年

出典：『平成27(2015)年版　救急・救助の現況』
消防庁